
パンデミック

柊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パンデミック

【Nコード】

N9332Y

【作者名】

柊

【あらすじ】

ある休日それが起きる。俺が起きると信じられない、いや、信じたくない光景が目飛び込んでくる。

誤字脱字があれば言うていただけると嬉しいです。感想など書いていただくと舞うほどうれしいです。

以下二つの話は同じ世界の話ですが、主人公が違います。見てみてください。

<http://ncode.syosetu.com/n10>

9 2 z /
h t t p : / / n c o d e . s y o s e t u . c o m / n 1 0
8 5 z /

終わりの始まり

ちっ、外が騒がしいな。休日位ゆっくりと寝させてほしいものだが、朝食を取った後眠くもう一度寝ていたが、時間帯午前11時くらいだろうか。

外の騒がしさのせいで目が覚めた。

何だろうか、騒がしいと言つか悲鳴のようなものが聞こえる。はっきり言って煩いし、迷惑だ。

・・・何かおかしい。悲鳴が聞こえた、それじゃない。もっと、根本的に何かが・・・そうだ、悲鳴が大勢多数のものだった気がする。

何処からだ？

その疑問の答えを見つけるべく俺は窓から外を見た。

「ははっ、なんだこれ。」

俺の目に映ったその光景は信じがたいもので。

そして、同時に自分の目を疑いたくなるようなものだった。

「人が人を襲っている・・・？」

逃げ惑う人、そしてそれを追う者二種類の人間に分かれていた。

「おいおいおい、どうなってんだよこれはよお。」

夢の続きか？そうだとっても悪夢の類だろうか。

いやいやどうする、どうしたらいいんだ？

考えていると家のドアが開く音がした。

あれが入って来たか！？

しかし、予想とは裏腹に入って来た者は違った。

「おい、大丈夫か？いや腕を怪我しているのか。」

入ってきたのは、20代くらいの男性で腕を怪我していた。何か引き裂かれたような感じだった。

「おい、何があつたんだ。説明してくれ！」

だが、入ってきたのは男性だけに止まらなくそれは叶わなかった。

「ちっ、追われていたのかよ。」

男性は逃げてきたらしく、奴らが入ってきた。

ここは逃げるしかないか・・・ない！！

俺は靴を手に取りすぐに自室まで戻り、ベッドの下からバックを取り出した。

震災などに備えて用意していたバッグがこんなところで役に立つとはな。

「これも持っていくか。」

そう言い取り出したのは刃渡り15cm程のナイフだった。それをベルトで腰に付け窓から外に出た。

「まったく。夢じゃないんだよね？」

相変わらず、おかしい状況が続いていた。

道には奴らしかいないんじゃないのか、と錯覚してしまうほどだった。

いや、実際に人と言えるような者は皆逃げたのだろう。

「ここに居たらまずいか。」

だが、だからと言って何処に行こうか？

「うわあああああ」

そう考えていると男性の悲鳴が聞こえた。

悲鳴の聴こえた方へ目を向けると予想通り男性が襲われていた。男性は捕まれている抵抗できないでいたようだ。

ちっ、やるしかないか!!

「おらあああああ!!」

ナイフをホルダーから抜き、後ろから心臓を刺す。

人を殺すなんて初めてなんだがな・・・いやもう人とは呼べないか。

「おい、大丈夫・・・!!」

たしかに心臓を刺したはずだ。いや、人体の構造について詳しい知識があるわけではないが
心臓の大体の位置位は知ってるつもりだ。
なら・・・なんで

「なんで動いてるんだよ!!??」

おかしいおかしいおかしい

そいつは首を後ろに180度回転してこちらを見ている。
その瞬間頭の中で警報が鳴り響く。

くそっ、心臓で駄目なら・・・頭はどうだ!

そして奴の目からの脳までに向かってナイフを突き刺す。

これでもダメか・・・?

そう思っていたが奴は力を無くした。

「はぁ、はぁ、はぁ。おい、あんた大丈夫か？」

見たところ腕を怪我していた。見た感じ食い干切られた
ような傷だった。

「とりあえず歩けるか?ここに居たらまだ危険だろうから。
って、聞こえてるか?」

何処か様子がおかしい。問いかけても全く反応しない。
そろそろ痺れを切らし、措いて行こうかとも考えていた時・・・

「ん？」

反応がなかった男性が目を見開き、こちらを向いた。そして、そのまま俺の腕を掴んできた。

なんつう腕力だよ。かなり握りしめられている。

男性は俺に顔を近づけようとして・・・

「!!!」

俺は一瞬で判断を下し男性の目をナイフで刺した。正確に言うならば、男性の頭を目がけて・・・だ。

「クソツたれが!!!」

間違いない。こいつもあいつらと同じように俺を噛もうとしてきやがった。

男性が力尽きたのを確認し、ナイフを抜いた。

「とりあえず何処かで考えをまとめよう。」

そう言い何処か気休めの安全な場所を探すことにした。

終わりの始まり（後書き）

こんな感じの小説です。

暖かい目で見てもらえると嬉しいです。

色々確認(前書き)

やっと2話です。

京谷さん……投稿早すぎです。

色々確認

とりあえず奴らを躲かわしながら近くの公園に来ていた。公園にある遊具の中に隠れてとりあえずやり過ごすことにした。

よし、まずはこれまでの状況をまとめてみよう。

まず朝の11時くらいに悲鳴が聞こえて俺は起きた、

そして人が人を襲っているという場面を目撃し、

その後家から俺は脱出して通りに出た。

そこまでは良かったが男性が襲われているのを見て、

後ろから奴の心臓をナイフで刺した・・・が死ななかった。

次に頭を刺したら死んだようだったが。

男性は傷を負わされたようで、腕をかまれたような感じだった。

しばらく反応が無かったがそれから少ししてこちらを向き、

俺の腕を掴んできた。そしてそのまま俺のことを噛かもうとしてきたから

それを俺が阻止そしするために男性を殺した。

で、今に至いたる。と言う感じか・・・

今までに起こってきたことは大体まとまったな。

ちなみに今は午後1時くらいだ。

次にこれまで起こって来たことから

奴らについてわかることは、奴らは頭部へダメージを与えなければ死なないようだ。それと腕力がとても強いこと。

そして、おそらくやつらは何かの感染症の類かかに罹かかっているのだろう。噛み傷からそれが感染するのだろう。

先ほどの男性がその例だ。

とりあえず今わかることはこのくらいか。

次は何をするべきかな・・・

そう考えているとあることに思い出した。

「そつだ、このバックの中確認しないと。」

俺は背負っていたバックを降ろし中中を確認することにした。バックを逆さにし、バックの中身をぶちまけた。

中からはいろいろなものが出てきた。

「まずラジオか。一気に出したのはまずかったか・・・？」

壊れてないか心配になってきた。

「次に、・・・懐中電灯。」

なんで中身ぶちまけたんだろう。

「後は絆創膏はよなどの医療具と・・・」

残りの目の前にあるものを一つ一つ手に取りながら確認していく。

「500mlペットボトルの水3本、金平糖、缶詰6つ、乾パン4つ、

保存パン4つ、と言ったところか。」

食糧多いな、通りでバックが4、5？位するわけだ。でも、一週間くらいはもちそつだな。

それともう一つ入っていたであろう物があった。

「ナイフ……か。今使ってるものとは違う……よな。
刃渡り15、いや16cmくらいか。」

そうだ、これの後に買ったナイフが今使っている奴で
そっち気に入ったからこれを非常用にしたんだ。
……今はバッグに入れておくか。

俺はバッグの中身を全部バッグの中に戻した。

「これで確認は終わったな。」

とりあえず落ち着いたし、連絡を取ってみるか。

俺はバッグを背負いポケットから携帯電話を取り出し
遊具から出た。

そしてある人物と連絡を取る。

その人物とは火神^{かがみ} 冬威^{とついで}……俺の親友だ。

1 コール……出ない。 2 コール……出ない。 3 コール……出
た。

繋がった。

「冬威か!？」

「ああ、お前か。」

冬威と言う事は確認した。

「冬威今どこにいる。」

「今は家……に向かっている。詳しく言えばコンビニから出てすぐだ。」

「とりあえずどこかで合流しよう」

「いいけど、やっぱりお前も見たのか。アレ。」

「ああ、そうだ。アイツらに噛まれるなよ？噛み傷から感染病の類が感染すると思う、感染したら奴らの仲間入りだ
できるだけ奴らを避ける。」

「情報ありがとう。じゃあ俺からもやる。奴らは目が悪い、いや目は見えないんだと思う。」

その代り聴力が良くて、それで人を追いかけてるんだと思う。」

「そうなのか？」

「ああ、携帯電話のコールの音のせいかな奴らが集まってきたからな。」

「それは悪いことしたな。しかし、やっと分かったよ。どうりで奴らが

こっちに向かってくるはずだ。まあ、お互い死なないようにな。」

「それで、どこで合流する？」

時折電話から何かを殴ったりする音が聞こえてくる。

俺も逃げるか。

「お前の家は安全なのか？」

「ああ、今のところはな。」

「じゃあ、俺がお前の家に行く。時間は4時くらいになると思っ。」

「わかった。そろそろ切るぞ。気をつけろよ。」

「ああ、冬威もな。」

冬威はそれを聞いて電話を切ったようだ。

「さて俺もさっさと逃げるか。」

これで目標が決まった。そしてその約束を守るべく俺は行動に移った。

色々と確認（後書き）

そろそろ二人目のキャラクターが出ます。

名前だけ出ましたが冬威です。

拳銃（前書き）

相変わらず遅い投稿だなと思う。

拳銃

冬威と連絡を取りあった後、すぐに移動することにした。

冬威との会話中に奴らが集まってきたが、そいつ等との戦闘はできるだけ避けるようにした。

避けれない奴だけ殺すようにした。

戦わないようにしているのは、戦うと奴らに囲まれる可能性が高いからだ。

まして今の装備はナイフだ、これでは一体やるのにですら時間がかかる。

確実に囲まれると言ってもいい。銃とかなら楽なんだがな……。

走っているうちに奴らは撒けたようだ。

「よし、何とかなったか。」

流石にずっと走ってたから疲れたな。

そう思い何処か休めるところを探していた時……

「ちっ、また奴らか。」

また、奴が歩いていた。また奴らかよ、と悪態をついたが俺はあることに気付いた。気付いた事とはそいつの服装だ。

もしかして……

俺はそいつを避けずに殺した・・・
殺すときにはできるだけ音をたてないように気を付け
倒れる時も音を立てないようにおろした。
暗殺者みたいだな、日本だと忍者か？
そんな事を考えながら俺はそいつの装備を漁っていた。
こんなことを考えられるなんて段々この状況に慣れて来ているのか
もしれないな。

そして、目当てのものが見つかった。

「本物なんて初めて持ったな。ま、それが当然か。」

俺の手にあるのは黒光りした物、拳銃だ。

俺が殺したのは恐らく警察官だった者だ。

まあ、拳銃もってるし警官だったろうけど。

これは拝借していこうか。

これで少しは奴らへの抵抗が楽になったかな。

だが奴らは耳が良いらしいし、それに弾薬も限られてるから
使いどころを考えないとな。

長居するのもよくない、冬威の家に向かうか。

拳銃（後書き）

まあ、特にいらぬシーンにも見えるかもしれないけど拳銃を手に入れるシーンを入れたかったんです。

冬威（前書き）

相変わらず会話が少なく、地の文が多いなあ。

ちょっと、そこあなた読むの面倒とか思わないで！！

痛みで悶えている俺に冬威が笑いながらそんなことを言ってくる。
こ、こいつうううううううう！！俺が悪かったのか！？

俺は悪くなかったはずだ！何度ドアをゆっくり開けと言えば分るんだ！！

てか、俺来たときに狙ってやってるのか！？

まあでも良かったこいつは奴らになっていなかった。

このお気楽な性格が今は懐なつかしく心地こころよい感じがする。

「とりあえず家の中に入れよ。ここで騒ぐと奴らがよって来るしな。」

冬威はそう言いながら、俺を家の中へと入れてくれた。

玄関に入り見たところ争った形跡けいせきなどはなかった。

奴らに入られたりとかは無かったのだろう。

靴を脱ぎ家上がったところで冬威に言われた。

「お前まず風呂入れよ、流石さすがにそれはひどいぞ。」

冬威に苦笑い気味に俺の服を指された。

よく見ると、服は汚れていたしそれに所々血がついていた。

全く気にしてはいなかったが、言われてみるとひどいと思う。

まあ、気にしてる余裕もなかったのだけだ。

「ああ、これは本当にひどいな。そうさせてもらおうよ。」

「そうしろ、そうしろ。場所はわかるよな？先行っててくれ。」

「大丈夫だ」と返事をして風呂場へと向かう。

脱衣所に入り、そういえば湯は沸わいてるのだろうか？

と疑問に思い風呂の中を見てみたら、きちんと湯が沸いてある状態だった。

さっさと入るか、と思い服を脱いでそれを籠かごの中へと放り込んだ。風呂場に入り、先に体を洗ってしまってから湯につかる。

湯につかっていると脱衣所から、「着替えここに置いとくな」と冬威の声が聞こえた。俺は特に返事もしなかった。

ホント、風呂に入ってからこれほど気持ちいいと思ったことは無かったと思うほど気持ちがいい。

さてこれからどうしようかな。とりあえず、冬威とこれまでに得た情報を話し合うべきか。

それから今後を決めればいいのか。

これからのやることを決め、風呂から上がった。

脱衣所には冬威の服が置いてあった。

冬威の身長は180cm程で細ほそすぎず太ふと過ぎずと言う体型たいけいだ、冬威と俺の体型はあまり変わらないので、

サイズの面では心配は無い。

俺はさっさとそれを着て、リビングに向かった。

リビングでは冬威がソファに座りテレビを見ていた。

「おっ、早いな。」

冬威が目はテレビに向けながら話しかけてきた。

「いつもこの位だろ。」

「そうだったか。」

ははは、と笑いながら冬威が答える。

まったくこいつはどんな状況でも気楽にいられるんだな。
だが、今はそれに助けられてる気がするな。
ふと、今の時間を見たら6時前と言ったところだった。
テレビを見ていた冬威がこちらを振り返り俺に言った。

「飯を食う前に話し合うか？」

にやりと笑いながら・・・

こいつはいつもこうだった。俺の考えてることを読んでくる。
長年の付き合いから為せるなできる技なのだろうか？

だが俺から言う手間も省はぶけたし、そこは利点と言えるだろう。

「ああ、そうしよう。」

俺は不敵ふてきな笑みを浮うかかべ、それに答えた。

冬威（後書き）

この話には笑いが少ない！……仕方ないのかもしれないけど。

所々笑いを入れたいなあ。入れられるように頑張ろう、うん、そうしよう。

話し合い（前書き）

いつも通りタイトルは適当。

話し合い

俺と冬威は椅子に座りテーブルを挟んで向い合せになった。

「さて、まずはどっちから話す？」

「じゃあ、まず俺から話そうか」

話を持ちかけたほうが後になると言う、俺と冬威の中での暗黙の了解だ。

どっちが先だとかをずっと話しているのは時間の無駄だからだ。

「お互いに知っている情報があると思うから簡潔に言っていく、その中で疑問に思ったことなどがあつたら終わった後に質問する。これでもいいな」

「ああ、いいぞ」

「俺の解ってることは、奴らは心臓を突いたところで死なないことだ。」

それと動きが遅い事、複雑な動きができない事、だな。お前から聞いた事も含めれば

耳がいいこともだな。」

「それと噛まれたら奴らの仲間入り、ってところか？」

「ああ、そうだな」

結局のところあまりわかっていない気がする。

「で、これからどうするんだ？」

冬威がそう言うが、これからってなんだ？

「何をどうするんだ？」

「今後の活動予定だよ。何かしたいこととかないのかよ？」

したいことって、この世界でか？

「無いな」

「薄情な奴め」

「なんでだよ」

意味分からん

「はああ、お前このよう状況ならやること決まってるだろ？」

お前、映画とか見たことないの？」

「お前、遠まわしに俺を馬鹿にしてるだろ」

この状況でやることか、まあ奴が思ってることは

「ほかの生存者と合流することか？」

「はい、正解!!」

「流石だな」とか言いながら拍手してやがる。やっぱ、馬鹿にしてるだろ、おい。

「お前は助けたい奴はいないのか？」

「いない」

「即答かよ」

誰もいないから仕方がない。

「まあ、そう言うと思ったがな。」

そう思っているなら聞くなよ……

「お前はいないのか？彼女とか、友人とか」

一応冬威にも聞いてみる。

「結衣ゆいが家にいるらしいから、迎えに行きたいんだ。とりあえず結衣だけだ。」

「結衣か、じゃあそうしよう」

結衣とは冬威の彼女だ、二人はかなり仲がよく良いカップルと言ってるだろうと思う。

「ちなみに、明日の正午あたりと言ってある。」

ん？こいつ今さらりと妙なこと言わなかったか？
正午あたりと言ってある？お前それって

「もう約束付けてたのか！？」

「ああ、そうだよ」

こ、こいつは！ニコニコしながら言いやがって
今のセリフチャットならば「そうだよwwwwwwwwww」
って感じだなあ、おいィ！

まあ、どの道行くことになったただろうしいいか。

「お前は本当に誰か探したりしたい奴はいないのか？」

冬威はもう一度確認してきた。
だが、俺の答えは決まっている。

「いない」

「……そうか」

表情が曇り、少し哀しそうな声だった。

「はあ、途中で誰か生存者がいたらそれは助けてやるよ。
見捨てるのは目覚めが悪そうだな。」

「それでこそ、俺の親友だ！」

さっきとは違ういつもの明るい声でそう言った。

こいつは甘いと言うか優しいと言うか、こいつのいいところなんだろうけどな。

そうだ、あれをやるうと思っていたんだ。

俺は席を立ち、持っていたバッグを持ってもう一度座り直した。

「あつた、お前にこれをやるよ」

俺が差し出した物は刃渡り16cm程のナイフだ、バックに入れておいたやつだ。

「おいおい、これナイフじゃないか。」

冬威がナイフをホルダーから出し、色々な角度からを見ている。

「これは、法に触れてる長さじゃないのか？」

「銃刀法か、確かギリギリアウトだな」

「それって駄目じゃねえかよ」

「ハハハ」と何がおかしいんだか解らないが冬威が笑っている。

「ギリギリじゃなくて完全にアウトなものを見せてやるうか？」

次に俺はバッグからここに来る途中手に入れた物を取り出しテーブルの上に置いた。

「おいおい、これって拳銃じゃないのか？何処で手に入れたんだよ？」

聞いては来るものの一応聞く、と言った感じだな。
答えの予想は付くってか？お前の考えてるものが正解だろうけど
な。

「ここに来る途中に警察官だったと思われる奴から拝借した。」

「警察官だった、ねえ」

もうこの答えは予想できていたって感じだな。

冬威は拳銃を見ていて気付いたかのように言った。

「これ使ったら奴らが集まってきそうだな」

「そうなるだろうな、だから使いどころは考えないといけない」

「そうだな。それにしても本当に完全アウトだな」

俺は「だが」と続けそれに答えてやった。

「こんな世界じゃ法律なんてものはもう機能しないだろ？」

「それもそうだな」

納得と言つ感じで冬威が頷く。

「さてそろそろ、夕食の準備をしようか。お前は待っている」

冬威は拳銃をテーブルの上に置きこの話を切り上げ、
キッチンの方へと向かった。

夕食を取り部屋の電気をつけて気付いた。

「電気をつけている家が少ないな」

「ここら辺は住宅街、今日は休日、それでほとんどの人が外に出たんだろう。」

「だから人も少ないんだよ」

冬威がここは安全だと言ったが、そういう事もあったからだろう。

「済まないが冬威、俺は先に寝たい今日は疲れてしまったようだな。」

「おっ、そうか。じゃあ、どこで寝る？」

「できれば下の部屋にしてもらえとうれしい。その方が何かあった時の対処がしやすくなる」

「分かった。じゃあ、和室でいいか？」

「ああ」

その後冬威に案内され、和室で夜を過ごした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9332y/>

パンデミック

2012年1月13日23時55分発行